

仲間とともに運動する喜びを味わう体育科学習

シェア活動を位置付けた単元構成の工夫を通して

須恵町立須恵第二小学校
教諭 藤木 壮太

こんな手立てによって…

仲間と学びを共有する「シェア活動」を各段階のねらいに応じて単元に位置付けた。また、「シェア活動」を機能させるために教材化の工夫と具体的支援の工夫を行った。

こんな成果があった！

認識性(動きのポイントが分かること)や身体性(運動の特性に応じて体を操作すること)、さらには主体性(課題意識をもつことや運動への意欲)を高めることができた。

1 考えた

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、運動・スポーツに様々な関わり方や他者との関わり方を身に付けていくことが求められている。また、小学校学習指導要領解説「体育編」では、心身の健康の保持増進することが、生涯を通して豊かなスポーツライフを送るために、技能、知識と共にコミュニケーション能力や論理的思考力を育む必要があることを示している。

本学級(6年生・4年生)の児童にアンケート調査をしたところ、「動きのポイントが分からない(認識性)」「運動が得意ではない(身体性)」「運動意欲は高いが、めあてを意識していない(主体性)」という課題が明らかになった。そこで、この課題を解決するために、各段階の課題に応じた「シェア活動」を位置付け、仲間とともに運動する喜びを味わわせ、認識性、身体性、主体性を高めたいと考えた。

2 やって見た

検証授業Ⅰでは、「走り高跳び」をチーム対抗戦にして実践した。「助走」「踏み切り」「空中姿勢」に視点を置いた「シェア活動」を行うことで、仲間とアドバイスをし合いながら、動きを身に付け、個々の記録も高めることができた。検証授業Ⅱでは、「ソフトバレーボール」を実践した。「打ち方」「ポジショニング」に視点を置いた「シェア活動」を行うことで、チームで作戦を立て、関係した攻撃を攻防することができた。検証授業Ⅲでは、「表現」を実践した。場面の「イメージ」と「動き方」を視点に置いた「シェア活動」を行うことで、チームごとに様々な動き方を考え、表現を作り上げることができた。

3 成果があった！

3つの検証授業を通して、運動の動きのポイントが分かるようになったり(認識性)、動きの高まりを実感したりすること(身体性)ができた。また、できるようになりたいという課題意識が一層強くなり、運動への意欲(主体性)を向上させることができた。

仲間とともに運動する喜びを味わう体育科学習

シェア活動を位置付けた単元構成の工夫を通して

1	主題設定の理由	3
	(1) 現代社会の要請から	3
	(2) 平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果から	3
	(3) 児童の実態から	4
2	主題の意味	5
	(1) 「仲間とともに運動する」とは	5
	(2) 「仲間とともに運動する喜びを味わう体育科学習」とは	5
3	副主題の意味	6
	(1) 「シェア活動」とは	6
	(2) 「シェア活動を位置付けた単元構成の工夫」とは	6
4	研究の目標	7
5	研究の仮説	7
	(1) チームで活動する教材化の工夫	7
	(2) 動きや学びを共有し、高め合う具体的支援の工夫	7
6	研究の構想	8
7	研究の実際	9
	(1) 検証授業Ⅰの指導の実際と考察	9
	(2) 検証授業Ⅱの指導の実際と考察	14
	(3) 検証授業Ⅲの指導の実際と考察	20
8	全体考察	24
9	成果と課題	25
<参考文献>		25

仲間とともに運動する喜びを味わう体育科学習

シェア活動を位置付けた単元構成の工夫を通して

須恵町立須恵第二小学校

教諭 藤木 壮太

1 主題設定の理由

(1) 現代社会の要請から

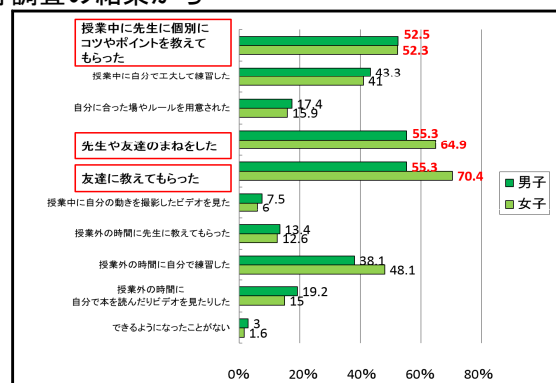
現代社会において、急速な情報化や技術革新により、私たちの生活は大きく変化し、「時間・空間・仲間」が減少し、さらに児童が外で遊ぶ機会が減少していると言われている。その結果、児童の体力低下、コミュニケーション能力の低下などの課題が生じている。平成27年に出された教育課程企画特別部会論点整理では、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機に、各学校段階で運動やスポーツに親しみ、「する、みる、支える」など様々な運動・スポーツへの関わり方を楽しむことができるようにしていくこと、スポーツを通じて他者との関わりを学んだり、ルールを守り、競い合ったりする力を身に付けることが示されている。これは生涯を通して、豊かなスポーツライフを送り、心身共に健康であることが、今後の我が国を支える根底にあると考える。また、小学校学習指導要領体育編では、改善の基本方針の中で次のように記載されている。

体を動かすことが、身体能力を身に付けるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや筋道を立てて練習や作戦を考え、改善方法などを互いに話し合う活動などを通じて、論理的思考力を育むことにも資することを踏まえ、それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、基礎的な身体能力や知識を身に付け、生涯にわたって運動に親しみることができるように…

このことから体育科学習では心身の発達、技能や知識の習得と共に、他者とのコミュニケーション能力や論理的思考力を育成していく必要があることが分かる。

(2) 平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果から

【資料1】は、平成27年全国体力・運動能力、運動習慣等調査における「体育の授業でできなかったことができるようになったきっかけ」の結果である。できるようになったきっかけの多くは、先生や友達など人との関わりであることが分かる。つまり、体育科学習において学び合いを位置付けることで、運動やスポーツにおける技能や知識を身に付けることにつながると考える。



【資料1】体育の授業でできるようになったきっかけ

(3) 児童の実態から

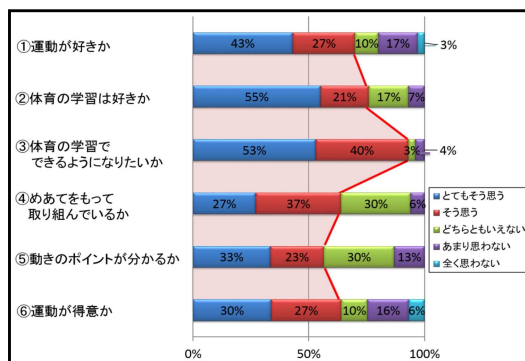
本研究は、第6学年、第4学年で実践した。第6学年の運動に関するアンケートの集計結果が【資料2】、また第4学年の集計結果が【資料3】である。この結果から「①運動が好きか」「②体育の学習は好きか」「③体育の授業でできるようになりたいか」という項目において、「とてもそう思う」「そう思う」と答えた児童が約70%程度いることが分かる。しかし、「④めあてをもって取り組んでいるか」「⑤動きのポイントが分かるか」「⑥運動が得意か」という項目では、約50%程度と低いことが分かる。

以上のことから、本研究を行った2つの学級の児童の実態として、運動に対する意欲は比較的高いことが分かる。しかし、運動のポイントとといった知識が深まっていないこと、また運動ができるという技能に対する自信をもっていないことに課題があると考える。これは目標となるイメージをもつことができないことで、めあてがつかめなかったり、自己評価できなかったりしたからだと考える。

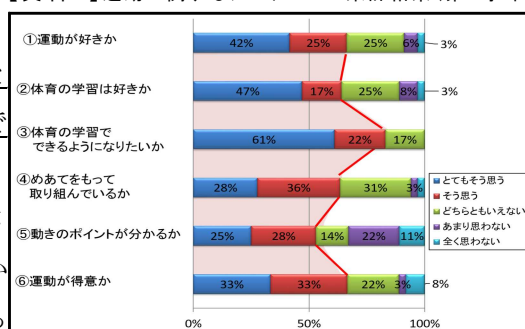
【資料4】は、友達との学び合いに関するアンケートの結果である。「①友達と一緒に活動することが好きか」では、どちらも90%以上の児童が「とてもそう思う」「そう思う」と答えている。しかし、「②体育の学習で話し合ったことがあるか」では、どちらも約50%程度にとどまっております、体育科学習での学び合いの経験が十分ではないことが分かる。

また、友達と一緒に活動すること(仲間のよさ)に対する肯定的な主な理由が、【資料5】である。この【資料5】から一緒に活動することで、楽しさを感じたり、友達の意見を聞いたりすることで、学びを深めたりするよさを実感していることが分かる。体育科学習では、仲間とともに運動やスポーツを通して責任や協力といった態度について学ぶと同時に、動きを見合ったり、教え合ったりして、運動そのものに関する知識や技能についても学びを深めるため、仲間との学び合いが必要である。

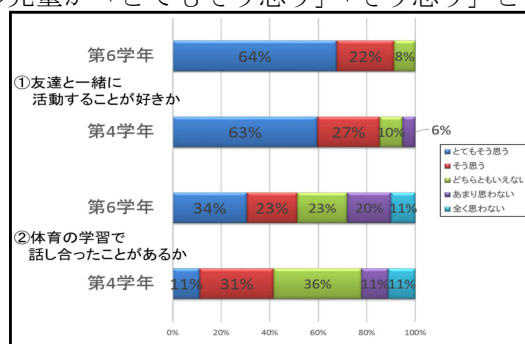
以上のことから、体育科学習において友達と一緒に活動する学習活動を位置付ける必要があると考える。



【資料2】運動に関するアンケートの集計結果(第6学年)



【資料2】運動に関するアンケートの集計結果(第4学年)



【資料4】学び合いに関するアンケート集計結果

- ・友達と一緒に活動すると楽しいから
- ・友達といいところをみることができ、仲が深まるから
- ・分らないことでも、友達から教えてもらうことができるから
- ・友達の意見を聞くことができるから

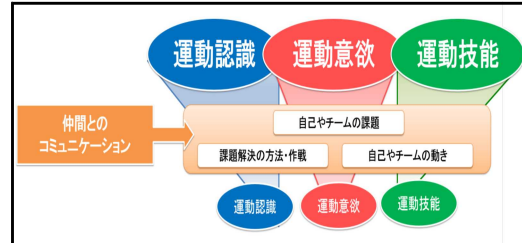
【資料5】友達と一緒に活動すること(仲間のよさ)に対する肯定的な理由

2 主題の意味

(1) 「仲間とともに運動する」とは

「仲間とともに運動する」とは、仲間とのコミュニケーションを通して、目標や知識を共有したり、技能を高め合ったりしながら運動することである。

仲間とともに運動するとは、目標を共有したり、共有した目標に対してアドバイス・賞賛・励ましなどのコミュニケーションをとったりしながら運動することである。具体的には、自分やチームの課題や課題解決のための方法や作戦を話し合ったり、自己やチームの動きの高まりを認め合ったりすることである。これにより、動きのポイントやコツ、体の動かし方などが分かたり、また運動の特性に応じた運動技能を身に付けたり、さらには運動に主体的に取り組みうとしたりする運動意欲の向上につながると考える。



【図1】仲間とのコミュニケーションを通して運動することで得られる効果

(2) 「仲間とともに運動する喜びを味わう体育科学学習」とは

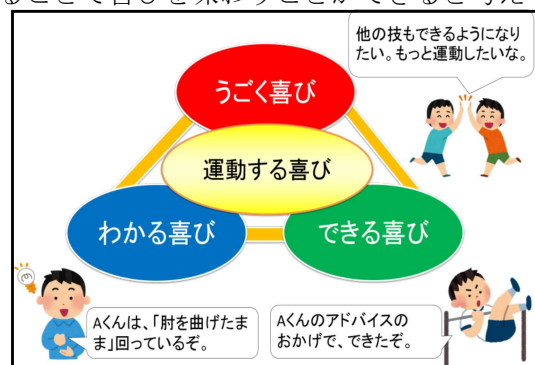
「仲間とともに運動する喜びを味わう体育科学学習」とは、同じ目標をもった仲間同士が運動やスポーツを行う中で、「わかる喜び」「できる喜び」「うごく喜び」を味わい、「認識性」「身体性」「主体性」を効果的に高める体育科学学習である。

運動やスポーツでは、仲間と競ったり、一緒に表現したり、目標を達成しようとする。本研究では目標を共有している仲間と運動をしていく中で、次の三つの運動する喜びを味わうことができると考える。

〔運動する喜びを構成する三要素〕

運動する喜び	内容	関連する資質
①わかる喜び	運動の特性に応じた課題解決の方途や体の動かし方や動き方が分かること	認識性
②できる喜び	運動の特性に応じて体を動かすことができること	身体性
③うごく喜び	課題意識をもって、意欲的に体を動かすこと	主体性

目標を共有している仲間と運動することで、仲間の動きやアドバイスを見合ったり、聴き合ったりする。これにより、体の動かし方やゲームの中での動きが分かたり（わかる喜び）、その動きを身に付けたり（できる喜び）することで喜びを味わうことができると考える。また、体の動かし方が分かたり、動きを身に付けたりすると、もっとできるようになりたい、運動したいという意欲（うごく喜び）が高まる。運動する喜びは、【図2】のように構成され、積み重ねていくことで、認識性、身体性、主体性を高めることができると考える。そこで本研究では、運動する喜びを味わうことができるように、学び合う活動を位置付ける。



【図2】運動する喜びを構成する三要素

3 副主題の意味

(1) 「シェア活動」とは

「シェア活動」とは、課題を共有したり、学習したことを広げたり、深めたり、互いの伸びを認め合ったりする学び合う活動である。

シェアとは、個々が獲得した知識や技術を共有することである。シェア活動とは、学習の中で課題をつかんだり、学習の喜びを実感したりする仲間と学び合う活動である。

体育科学習には、仲間と関わり合いながら活動するという社会的態度を育成することができるという教科の特性があることから、これを効果的に機能させることで、新たな学びや価値を深めることができる。そこで、本研究では、以下に示すシェア活動により、児童は運動における体の動かし方や課題解決の方法を仲間と共有することで、アドバイスや動きを付加修正・強化し、児童のもつ認識性、身体性、主体性を高めることができると考える。

つかむシェア活動・・・自己やチームの課題やその解決方法をつかむために学び合う活動
 高めるシェア活動・・・運動に対する知識や技能を付加修正・強化するために学び合う活動
 味わうシェア活動・・・自己やチームの伸びや成長をふり返るために学び合う活動

(2) 「シェア活動を位置付けた単元構成の工夫」とは

「シェア活動を位置付けた単元構成の工夫」とは、「つかむシェア活動」「高めるシェア活動」「味わうシェア活動」の3つのシェア活動を単元に位置付けることである。

まず「つかむ段階」では、「つかむシェア活動」を位置付ける。これにより、単元導入時において、課題や目標となる動きを把握することができる。

次に「高める段階」では、チーム別練習後やチーム別練習の際に、「高めるシェア活動」を位置付ける。これにより、課題を共有化した仲間の動きを見合い、アドバイスなどを通して、課題追究することができる。

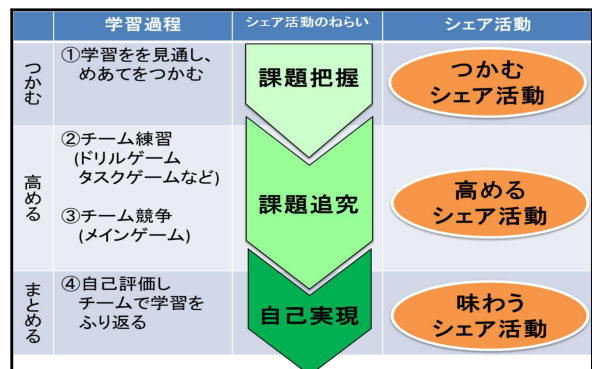
最後に「味わう段階」では、「味わうシェア活動」を位置付ける。これにより、学習をふり返ることで、自己やチームの伸びを出し合い、自己実現した動きを味わうことができる。また1単位時間においても、

【図4】のように、「つかむシェア活動」「高めるシェア活動」「味わうシェア活動」の順に位置付ける。

以上のように、ねらいの異なる3つのシェア活動を単元を通して位置付けることで、児童は運動の特性に応じた動き、課題や解決方法が分かたり（認識性）、運動の特性に応じた技能を身に付けたり（身体性）、さらには課題意識をもって、運動に主体的に取り組んだりする（主体性）ことができると考える。



【図3】単元全体で中心となるシェア活動



【図4】1単位時間でのシェア活動の位置付け

4 研究の目標

仲間とともに運動する喜びを味わう児童を育むために、シェア活動を位置付けた体育科学習の在り方を究明する。

5 研究の仮説

体育科学習において、以下の2点の手立てを工夫したシェア活動を位置付ければ仲間とともに運動する喜びを味わう児童を育むことができるであろう。

- (1) チームで活動する教材化の工夫
- (2) 動きや学びを共有し、高め合うための具体的支援の工夫

(1) チームで活動する教材化の工夫

本研究では、シェア活動を通して「認識性」「身体性」「主体性」を高めることをねらいとしている。そこで、取り扱う運動領域を以下の視点で教材化していく。

教材化の視点	内容
ルールの工夫	①個人競技を集団競技に作り変える、集団競技の特性を一層引き出すなどチームで学習することができるようにする。 (運動の集団化) (例) 走り高跳び(個人競技) → チーム競争など
	②児童が身に付けた身体性・認識性を発揮し、主体的に取り組むことができるようにルールを工夫する。 (意欲の喚起) (例) 走り高跳び → 目標記録との差を得点化した競争など
練習方法の工夫	練習の場を工夫し、児童にその運動の特性に応じた身体性及び認識性を習得・向上させることができるようにする。 (例) 走り高跳び: 「踏み切り」等の部分的な動きの練習する場 (例) ボール運動: 基本的なボール操作を習得するドリルゲーム、タスクゲーム (例) 表現運動: 特徴を捉えて動きの素地作り

【資料6】教材化の視点

(2) 動きや学びを共有し、高め合う具体的支援の工夫

ア 動きのポイントや課題の共有化を図る資料の工夫

シェア活動を機能させていくために、個々の課題や動きを視覚的に捉えさせたり、活動を通して得た学びを広げさせたりすることが必要である。そこで、以下の視点に沿って、資料を工夫していくこととする。

共有化を図る資料	内容
ゴール像が明確に捉えられる資料	学習でどのような動きを身に付ければよいのかを視覚的に捉えることができるようにする。(例) 映像, 写真など
動きを言語化し、共有するための資料	児童が学習で得た自己やチームの課題や動きのポイントを図や写真を活用しながら、気付いたり、分かったりした内容を表現することができるようにする。(例) 作戦ボードなど

【資料7】共有化を図る資料の視点

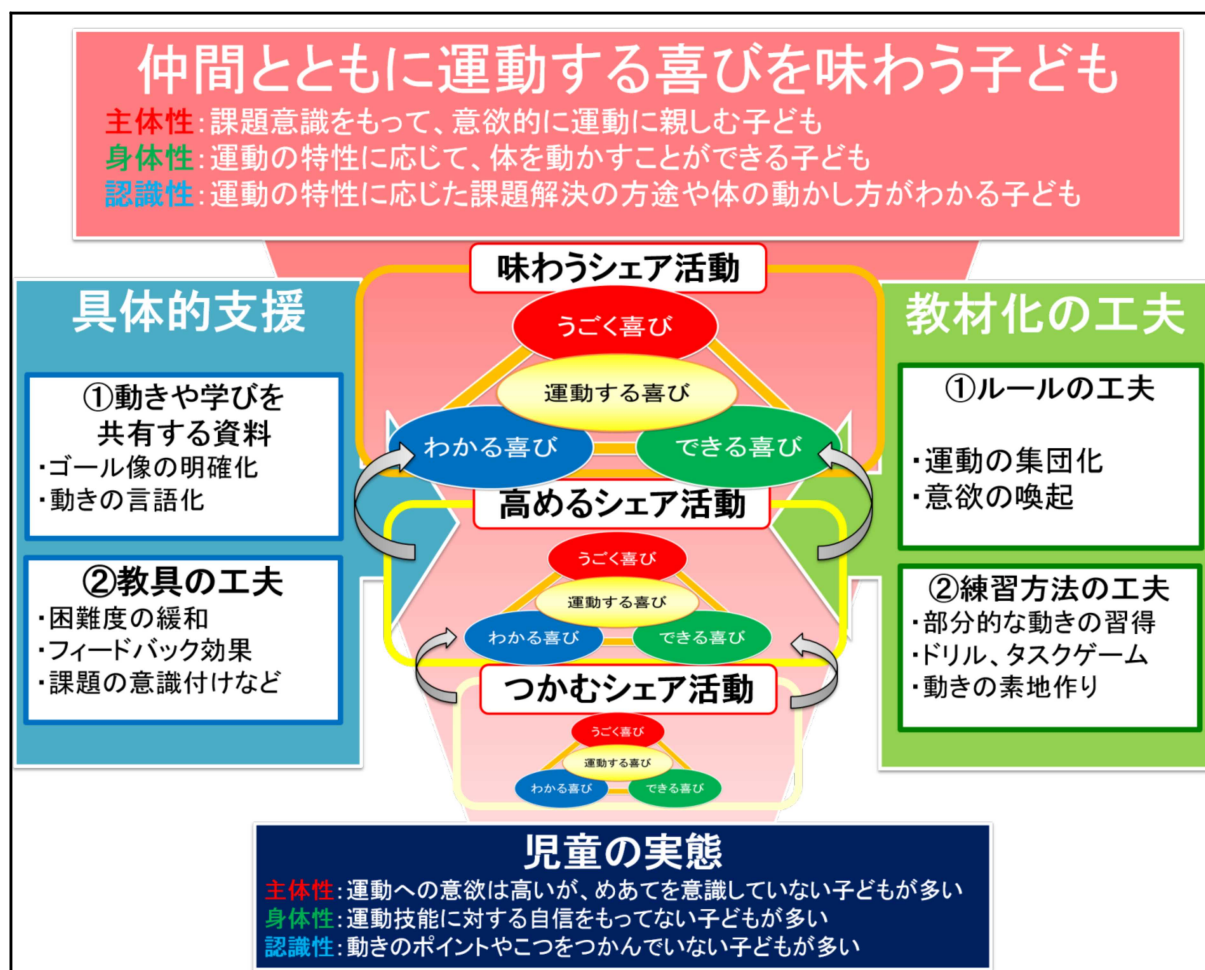
イ 教具の工夫

体育科学習の中で、各種運動の動きを緩和して習得しやすくしたり、仲間の動きを判断しやすくしたり、課題意識をもたせたりする教具が必要である。岩田靖著の「体育の教材を創る」では、教具には7つの機能があると考えられている。教具の機能は本研究で述べる運動する喜びを構成する三要素に関連していると考え、【資料7】のように整理した。そこで、教具を工夫する際には、その関連に留意することとする。

	教具の機能	運動する喜びを構成する三要素との関わり
①	運動課題に対する困難度の緩和	身体性
②	運動の制限の追加（空間・方向・位置など）	
③	運動のできばえのフィードバック効果	認識性
④	運動の原理や概念を直観的・視覚的に提示	
⑤	運動の課題性を意識，方向付け	主体性
⑥	運動課題に対する心理的不安の除去，安全の確保	
⑦	運動の学習機会を増大，効率の向上	

【資料8】 教具のもつ主な機能と運動する喜びを構成する三要素との関わり

6 研究の構想



【図5】 研究構想図

7 研究の実際

(1) 検証授業 I の指導の実際と考察

単元名 「走り高跳びチーム対抗戦をしよう」(C 陸上運動 エ 走り高跳び)

ア 単元目標

○動きのポイントを見つけ、課題に応じた練習を選択したり、アドバイスしたりすることができる。	【認識性】
○リズムカルな助走から、高く踏み切り、はさみ跳びで跳ぶことができる。	【身体性】
○ルールを守って、仲間と協力して進んで練習やゲームをすることができる。	【主体性】

イ 単元計画 (6時間)

つかむ (2)	高める (3)	味わう (1)
1 試しの記録測定を行い、学習のめあてをつかむ。	2 チームで課題に応じた練習方法を選択し、動きを高める。	3 身に付けた動きを生かし、チーム対抗戦を行う。
<p>【つかむシェア活動】 VTR や試しの運動を通して、学習課題をつかむ。</p>	<p>【高めるシェア活動】 チーム練習において、練習方法を選択したり、アドバイスをしたりして動きを高める。</p>	<p>【味わうシェア活動】 チーム対抗戦を通して、仲間の成長について賞賛し合う。</p>

ウ チームで活動する教材化の工夫

ルール設定の工夫	練習方法の工夫
<p>運動の集団化</p> <p>○1チーム5人のチーム競争 →「シェア活動」をより機能させるため</p>	<p>意欲の喚起</p> <p>○ノモグラムによる目標記録との差を 得点化競争 →目標記録達成に向けた課題意識をもたせるため</p>
	<p>○3つの練習方法の提示 →走り高跳びの課題となる動きを高めるため</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>助走コース</p> <p>助走からリズムよく踏み切るとの練習</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>踏み切りコース</p> <p>高く踏み切るとの練習</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>×跳びコース</p> <p>ふり上げ足、着地足を上平く蹴るとの練習</p> </div> </div> <p>【資料9】3つの練習の場</p>

エ 動きや学びを共有し、高め合う具体的支援の工夫

動きのポイントや課題の共有化を図る資料	本単元における教具	教具の機能
<p>○陸上選手の走り高跳びのVTR →動きの課題を共有するため</p> <p>○スキルブック →各チーム走り高跳びの動きを、シェア活動で共有するため</p> <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="margin-left: 10px;"> <p>← 自己の課題</p> <p>← 動きのポイント</p> </div> </div> <p>【資料10】スキルブック</p>	<p>○ケンステップ・踏み切り板</p> <p>○高跳び審判器 (成否の判定)</p> <p>○ノモグラム (目標記録の設定)</p> <p>○高跳び用ゴム</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>【資料11】ノモグラム</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>【資料12】高跳び審判器</p> </div> </div>	<p>①②</p> <p>③</p> <p>⑤</p> <p>⑦</p> <p>P8</p> <p>資料8</p>

オ つかむ段階（2時間）

目標 走り高跳びのイメージをもち、目標記録を設定し、学習課題をつかむことができる。

(ア)つかむ段階（第1時）

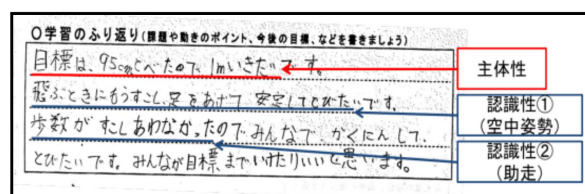
第1時では、まず走り高跳びチーム対抗戦のルールを提示し、走り高跳びをチームの総合点で競争することを確かめた。次に陸上選手のはさみ跳びの映像を見せ、動きのポイントについて考えさせた後に、チーム別に「つかむシェア活動」を行った。すると、【写真1】のように、足の上げ方や助走の仕方などについて話し合う姿が見られた。その後、ノモグラムで目標記録を設定させ、試しの記録測定を行った。



【写真1】つかむシェア活動で走り高跳びの動きについて話し合う様子

部分考察1

第1時終了後のA児の感想が【資料13】である。赤線部からは、目標記録など主体性に関する記述があることが分かる。このような記述は、走り高跳びをチーム対抗戦として教材化したことやノモグラムによる数値目標をもたせたことが有効だったと考える。また青線部からは、A児が空中姿勢や助走に着目した認識性に関する記述が見られた。これは、陸上選手の映像から目指す動きについてイメージを明確にもたせたことは、主体性を高める上で有効だったと考える。



【資料13】第1時後のA児の感想

(イ)つかむ段階（第2時）

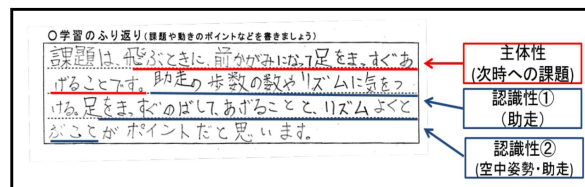
第2時では、はさみ跳びの一連の動きを「スキルブック」で確かめた。そして、第3時以降にチーム別練習を行うために、課題に応じた練習方法を提示し、試しの練習を行った。その後、「つかむシェア活動」で【写真2】のように、チームごとに課題と動きのポイントの色で分けて付箋紙に書き、その動きの部分に貼り付けて活用させた。



【写真2】スキルブックに動きのポイントをまとめる様子

部分考察2

第2時終了後のA児の感想が【資料14】である。「前かがみになって、足をまっすぐ上げる」といった動きのポイントについて、第1時よりも詳しく記述しているのが分かる。このような認識性に関する記述は、76%の児童に見られた。これは、「スキルブック」や練習方法を提示したことで、動きを見合う視点や課題を明確にもつことができたと考える。以上のことから、課題を明確につかむという主体性を高める上で「スキルブック」を活用した「つかむシェア活動」を位置付けたことは有効だったと考える。



【資料14】第2時後のA児の感想

カ 高める段階（3時間）

目標 チームで課題に応じた練習方法を選択し、動きを高めることができる。

(ア) 高める段階（第3時・第4時・第5時）

まず、前時までに多く出てきた課題を全体交流の場で確認した。チームごとに個人の課題を共有する「つかむシェア活動」後に、練習を行った。その際に、随時「高めるシェア活動」を行い、仲間の動きに対するアドバイスや賞賛を行うよう促した。踏み切り際に足が引っかかっていたB児に対して、【写真3】のようにC児が「助走のスタート位置を下げるといい」といった動きのアドバイスをしていた。その後、B児はスタート位置を下げたところ、【写真4】のように、リズムカルな助走から踏み切り板で踏み切り、跳ぶことができた。

本時学習の自己評価後、「味わうシェア活動」を行った。ここでは、本時学習における自己の伸びをふり返ったり、【写真5】のように「スキルブック」に学習で得た動きのポイントを貼ったりする姿が見られた。また、次時の練習方法を相談するチームもあった。

部分考察3

「高めるシェア活動」において、チームの仲間同士で動きのアドバイスをする姿が見られた。これは、児童が得た学びを「助走」「踏み切り」「空中姿勢」という視点で「高めるシェア活動」を行ったことで、課題解決の方法を見出すことができるようになり、認識性が高まったからだと考える。また練習を通して、児童の記録を更新することができた。これは仲間とのアドバイスを受けて練習したり、今までチームで得た学びを試したりすることで、動きのポイント（認識性）をつかみ、児童自身の動き（身体性）が高まったからだと考える。

学習終了後のD児の感想が【資料14】である。【資料14】から、踏み切りに関する動きのポイントが分かったこと（認識性）、そして高く跳ぶ感覚をつかんだこと（身体性）が分かる。さらに、次時で得た動きのポイントを生かして、跳ぼうとする意欲の高まり（主体性）も分かる。これは、「高めるシェア活動」で児童が得た動きのポイントが広がり、「味わうシェア活動」でD児が、その動きのポイントの理解が深まったと考える。

以上のことから、認識性、身体性、主体性を高める上で「高めるシェア活動」「味わうシェア活動」を位置付けたことは、有効だったと考える。



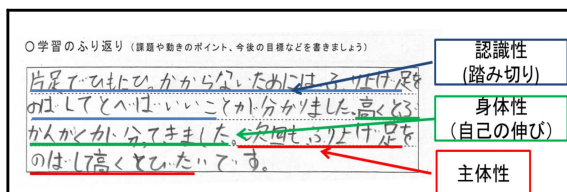
【写真3】 高めるシェア活動で動きを修正するB児



【写真4】 修正後のB児の跳躍



【写真5】 味わうシェア活動の様子



【資料15】 本時終了後のD児の感想

キ 味わう段階（1時間）

目標 高めた動きを生かして、「走り高跳びチーム対抗戦」を楽しむことができる。

味わう段階では、チームで準備運動後「走り高跳びチーム対抗戦」を行った。児童はこれまでの記録更新を目指して、意欲的に新記録に挑戦したり、チームの仲間が跳ぶ際にもアドバイスを送ったりすることができた。その後、「味わうシェア活動」を行い、仲間同士で賞賛の言葉をかけ合った。

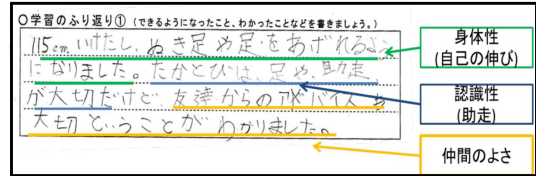


部分考察4

【資料16】は、学習終了後のE児の感想である。

【写真6】チーム走り高跳び対抗戦の様子

緑線からE児は記録更新したことと、自己の動きの変容をふり返っていることから、身体性の高まりを実感していることが分かる。また、足の動きや助走の仕方大切さについてふり返っていることから、認識性が高まっていることが分かる。このような認識性に関する記述は90%、また身体性に関する記述は88%の児童に見られた。このことから、動きのポイントの理解が深まり、走り高跳びの動きについて習得することができたと考える。以上のことから、認識性、身体性をつかむ上で「つかむシェア活動」「高めるシェア活動」「味わうシェア活動」を位置付けたことは有効だったと考える。

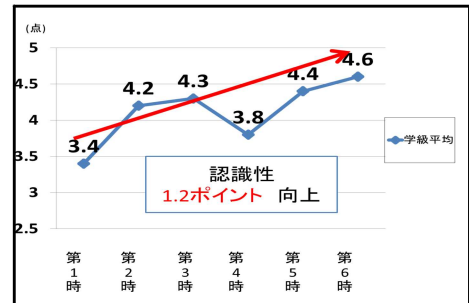


【資料16】学習後のE児の感想

ク 検証授業 I の全体考察

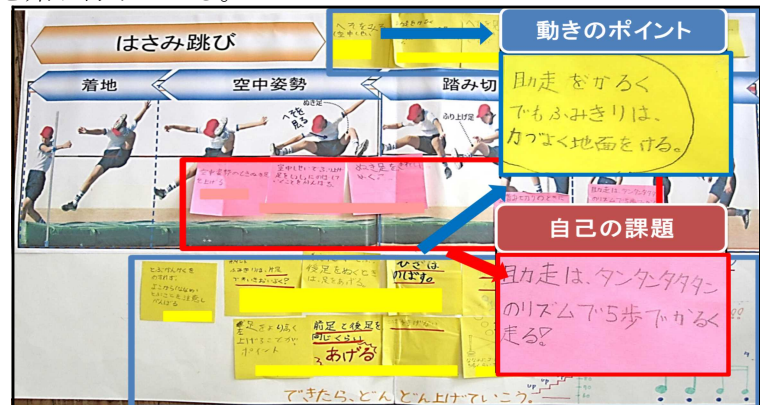
(ア) 「わかる喜びを味わう子ども」について

【資料17】は、動きのポイントをつかんだかを5段階評価で自己評価し、学級平均で表したものである。第1時から向上し、第6時では1.2ポイント高くなっていることが分かる。また【資料18】は、チームで作成した「スキルブック」である。【資料18】のスキルブックには「助走を軽く、踏み切りは強く」など動きのポイントを書いた黄色の付箋紙を貼り付けている。また、赤の付箋紙には、自己の課題を動きの部分に貼り付けている。



【資料17】「走り高跳びの動きのポイントをつかんだか」(認識性)の自己評価の推移

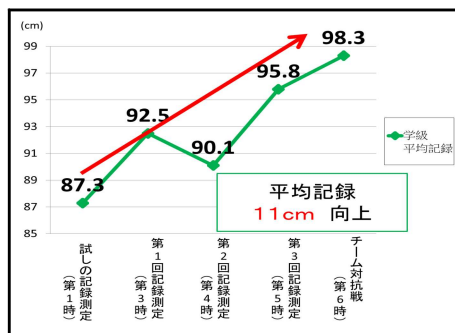
以上のことから、スキルブックを活用して「シェア活動」を行ったことは、課題を把握したり、動きのポイントをつかんだりする上で有効だったと考える。



【資料18】学習終了後のスキルブック

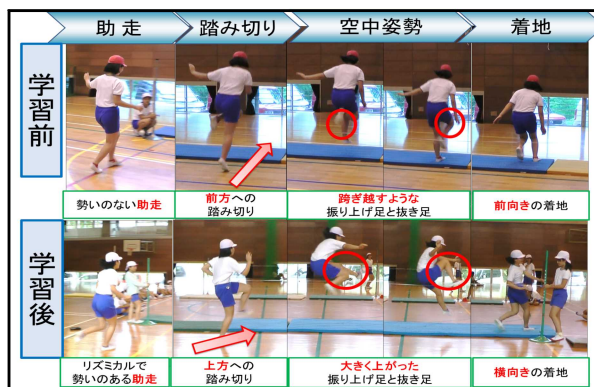
(イ) 「できる喜びを味わう子ども」について

【資料19】は、走り高跳びの学級平均記録の推移である。第1時の学級平均記録に比べ、向上し、第6時のチーム対抗戦では、11cmも高く跳ぶことができるようになっていることが分かる。



【資料19】走り高跳びの学級平均記録の推移

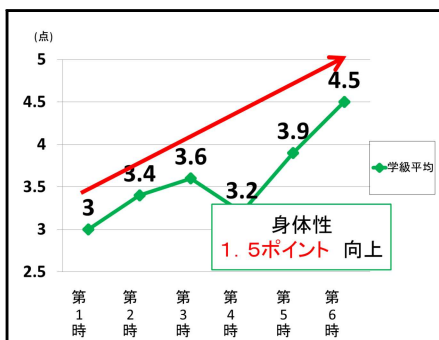
【写真7】は、学習前と学習後のF児の動きの変容を表した連続写真である。この【写真7】から、学習後ではF児がリズムカルな勢いのある助走、上方への踏み切り、大きく上がった振り上げ足と抜き足といったはさみ跳びの動きを身に付けていることが分かる。また、【資料20】



【写真7】F児の学習前と学習後の動きの変容

では、走り高跳びの自己の動きの自己評価したものを学級平均で表した推移である。

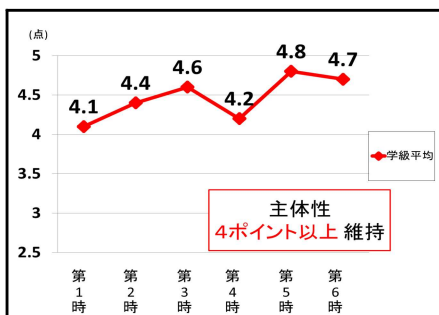
【資料20】から、第1時から向上し、第6時では1.5ポイント高くなっていることが分かる。このようにF児を始め、多くの児童が動きを高めることができた。これは、個人競技である走り高跳びをチーム対抗戦として教材化し、視点を明らかにした「シェア活動」を位置付けたことで、動きを見合い、動きが高まったからだと考える。



【資料20】「走り高跳びの動きができるようになったか」(身体性)の自己評価の推移

(ウ) 「うごく喜びを味わう子ども」について

【資料21】は、学習に対する態度の自己評価し、学級平均で表したものである。【資料21】を見ると、単元導入時から4ポイント以上と高い数値を維持していることが分かる。また、学習が進むにつれて、認識性、身体性の向上に伴い、主体性も高まったと考える。これは、走り高跳びのチーム得点化競争という教材化したことやシェア活動を位置付け、意図的な仲間との関わりを設定したからだと考える。



【資料21】「仲間と協力して、進んで運動できたか」(主体性)の自己評価の推移

ケ 検証授業 I の成果と課題

- 個人競技である走り高跳びをチーム対抗戦に教材化したことは、「シェア活動」を機能させ、認識性、身体性を高める上で有効だった。
- 「シェア活動」の中で映像やスキルブックなどの視覚的資料を用いることは、動きを見合ったり、アドバイスをしたりする上で有効だった。
- シェア活動のよさは実感しているが、自発的な発言の質的、量的に個人差があり、日常的にシェア活動の活用等を通して向上させる必要がある。

(2) 検証授業Ⅱの指導の実際と考察

単元名「1・2・アタック！バウンドバレーボール大会をしよう」(E ボール運動ネット型)


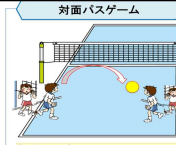

ア 単元目標

○得点するために、「打ち方」と「ポジショニング（位置取り）」に着目して、チームの作戦を立てることができる。 【認識性】
○基本的なボール操作を身に付け、三段攻撃で連係した攻防することができる。 【身体性】
○運動に進んで取り組み、仲間と協力して、作戦や連係した動きについて交流しながら、練習やゲームを行うことができる。 【主体性】

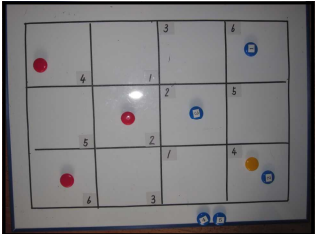

イ 単元計画（9時間）

つかむ（3）	高める（4）	味わう（2）
1 始めのゲームを行い、学習のめあてをつかむ。	2 チームで作戦を立て、三段攻撃で相手コートに打ち返し、ゲームを行う。	3 仲間と連係して、「バウンドバレーボール大会」を行う。
<p>〔つかむシェア活動〕 VTR や始めのゲームを通して、学習課題をつかむ。</p>	<p>〔高めるシェア活動〕 ドリルゲームや試しのゲームを通して、得点にするための動きを高める。</p>	<p>〔味わうシェア活動〕 「バウンドバレーボール大会」を通して、チームや仲間の成長を賞賛し合う。</p>

ウ チームで活動する教材化の工夫

ルール設定の工夫		練習方法の工夫
<p>運動の集団化</p> <p>○ワンバウンドまで</p> <p><u>パスを許容</u></p> <p>→連係した動きを容易にするため</p> <p>○全員が触れて返球</p> <p>→三段攻撃の役割を明確にするため</p>	<p>意欲の喚起</p> <p>○セカンドキャッチ</p> <p><u>ルール</u></p> <p>自陣で2番目にパスを受けた人は、ボールを捕ることができる。</p> <p>→アタックでの返球を容易にするため</p>	<p>○3つの練習方法(ドリルゲーム)の提示</p> <p>→基本的なボール操作を身に付けるため</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>円形バセゲーム</p>  <p>【練習の仕方】 ・全員で円形になり、パスをつなぐ。</p> <p>【目的】 ・基本的なボール操作を身に付ける。 ・ボールを必ず返す際のポジショニング ・声を出して、連係プレーの基礎を作る。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>対面バセゲーム</p>  <p>【練習の仕方】 ・各グループ対面にそれぞれ別れ。</p> <p>【目的】 ・基本的なボール操作を身に付ける。 ・相手コートにパスをつなぐ。 ・ボールを捕るための最適なポジショニング</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>トス&アタック</p>  <p>【練習の仕方】 ・セッター役のトスを上げ、アタック役が相手コートに打ち返す。</p> <p>【目的】 ・アタックの打ち方を身に付ける。 ・相対するコートにアタックする。</p> </div> </div> <p>【資料22】 3つの練習方法</p> <p>○試しのゲーム→チームの作戦の確認のため</p>

エ 動きや学びを共有し、高め合う具体的支援の工夫

動きのポイントや課題の共有化を図る資料	本単元における教具	教具の機能
<p>○ビーチバレーボールのVTR</p> <p>→動きの課題を共有するため</p> <p>○作戦ボード</p> <p>→チームで作戦を立て、共有するため</p> <p>○チームノート</p> <p>→作戦を振り返るため</p>  <p>【資料23】 作戦ボード</p>	<p>○ソフトバレーボール（操作の緩和）</p> <p>○作戦ボード・区分コート</p> <p>（作戦の共有化・意識化）</p>  <p>【資料24】 区分コート</p>	<p>①⑥</p> <p>①⑤</p> <p>P 8</p> <p>資料 8</p>

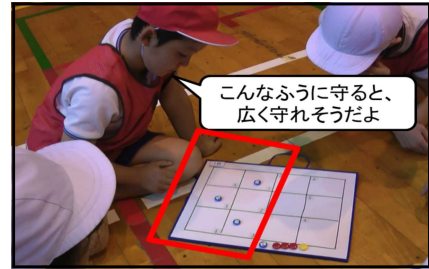
オ つかむ段階（3時間）

目標 ルールを知り、基本的なボール操作に慣れ、学習課題をつかむことができる。

(ア)つかむ段階（第1時・第2時）

まず、ビーチバレーボールのVTRを視聴する時間を設定し、その後全体でパスやアタックのイメージをもたせるために「つかむシェア活動」を行った。次に、バウンドバレーボールのルールを提示し、ボールに慣れる運動、さらにゲームを行った。ゲームでは、意欲的に活動したが、パスが中心となり、アタックを打つ段階に至らなかった。

第2時では「つかむシェア活動」において、【写真8】のように作戦ボードを用いて、「ボールの打ち方」「ポジショニング」（守る場所、移動する場所など）を話し合った。すると、ゲームではポジションを決めて守り、パスを高く上げて、繋ごうとすることができた。

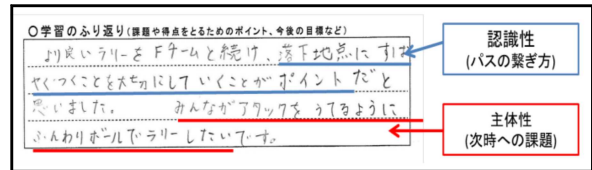


【写真8】つかむシェア活動で「ポジショニング」を話し合う様子

部分考察5

【資料25】は、第1時終了後のG児の感想である。G児の記述から、青線部からパスの繋ぎ方といった認識性、赤線部から次時への課題といった主体性に関するそれぞれ記述があることが分かる。学級全体では、パスをつなぐためのポイントなど認識性に関する記述が60%、次時への課題など主体性に関する記述が

74%の児童に見られた。このような記述があったのはVTRを視聴させたことで、パスやアタックの動きのイメージをもつことができたからだと考える。以上のことから、課題をつかむ上で視覚的資料を用いた



【資料25】第1時終了後のG児の感想

「つかむシェア活動」を位置付けたことは有効だったと考える。

(イ)つかむ段階（第3時）

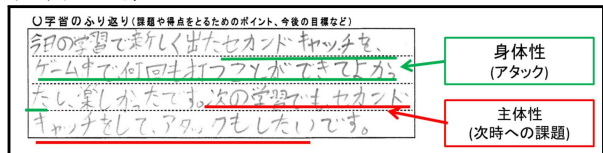
第3時では新たに「セカンドキャッチルール」を提示した。第2時での「打ち方」「ポジショニング」で立てた作戦を生かして、【写真9】のように「セカンドキャッチ」からアタックを打つことができるようになった。



【写真9】セカンドキャッチからアタックを打つ様子

部分考察6

【資料26】は、第3時終了時のH児の感想である。H児の記述から、「アタックを打ちたい」という単元目標である関係した攻防に意識が向いていること(主体性)が分かる。このようなアタックに焦点を当てた記述は、学級全体の66%の児童に見られた。これは、「セカンドキャ



【資料26】第3時終了後のH児の感想

ッチルール」という教材化により、アタックを容易に行うことができたからだと考える。以上のことから、単元目標である動きを主体的に追究させるために、「セカンドキャッチルール」を生かした教材化の工夫が有効だったと考える。

カ 高める段階 (4時間)

目標 チームで作戦を立て、相手が捕りにくいボールをアタックできる三段攻撃の連係した動きを高めて、攻防することができる。

(ア) 高める段階 (第4時・第5時)

高める段階、第4時・第5時では、三段攻撃で打ち返すようになることをめあてにした。そこで、「打ち方」「ポジショニング」を観点にして、「つかむシェア活動」を行い、チームごとに作戦を立てた。**【写真10】**のように、「アタックを打って、得点を増やしたい」という課題を持っていた白チームは「ネット際へのパスをすること」(打ち方)と「ネット際のプレーヤーがセカンドキャッチをすること」(ポジショニング)の作戦を立てた。

そして、試しのゲームに位置付けた「高めるシェア活動」で、白チームは、**【写真11】**のように、ポジショニングやそれぞれの役割など確認したり、アドバイスをし合ったりした。すると、**【写真12】**のように、相手コートへ三段攻撃で返球することができた。



【写真10】 第5時 つかむシェア活動の様子



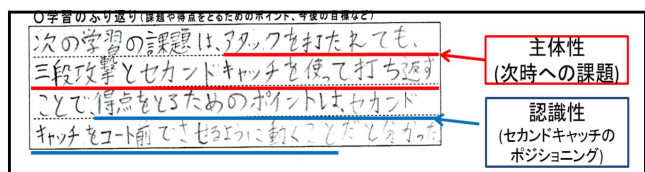
【写真11】 試しのゲームで高めるシェア活動を行う白チーム



【写真12】 「高めるシェア活動」後に三段攻撃を行う白チーム

部分考察7

【資料27】は、第5時終了後のI児の感想である。赤線部から、相手のアタックに対して、返球するための次時への課題といった主体性に関する記述、また青線部からは、セカンドキャッチをするポジショニングといった認識性に関する記述があることが分かる。このように三段攻撃に関する動きのポイントなど認識性に関する記述は、59%の児童に見られた。また、**【写真12】**のように、チームで連係して、ポジショニングや役割を決めて、ゲームで三段攻撃を行う姿が全てのチームに見られた。これは、「高めるシェア活動」でチームで動きを付加修正・強化を図り、認識性、身体性が高まったからだと考える。以上のことから、認識性や身体性、主体性を高める上で「高めるシェア活動」を位置付けたことは、有効だったと考える。



【資料27】 第5時終了時のI児の感想

(イ) 高める段階 (第6時・第7時)

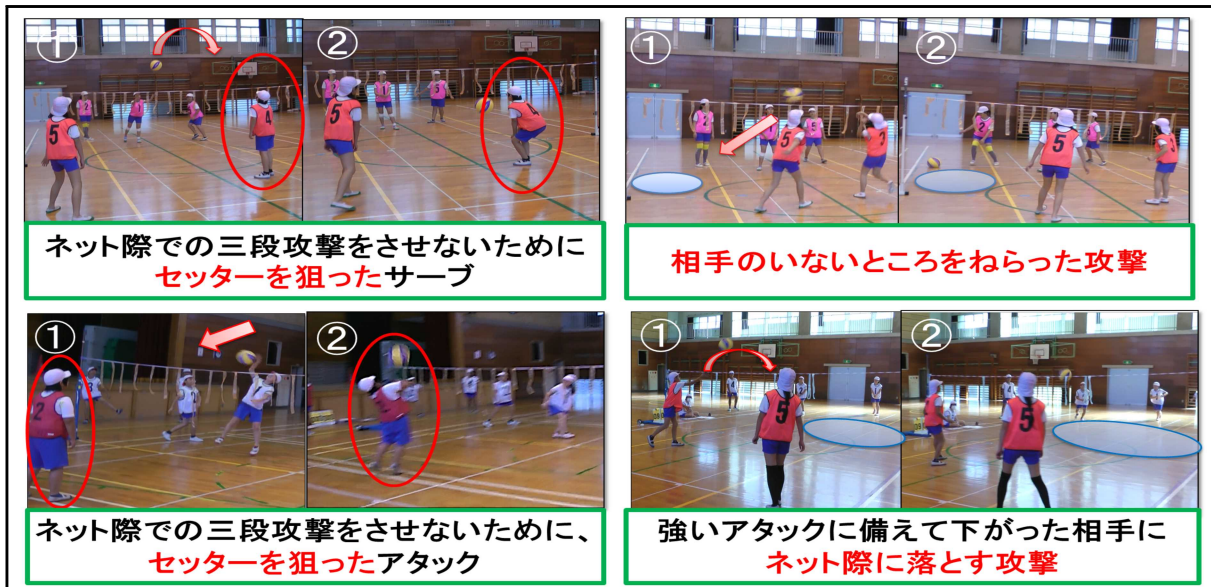
第6時・第7時では、得点するために、相手が捕りにくいボールを打ち返すことをめあてとした。そこで、前時までの児童の感想から、強弱をつけたアタックや相手がいないところに目を向けるようにした。

まず「つかむシェア活動」では、「打ち方」「ポジショニング」に着目させ、作戦を立てるようにした。【写真13】のピンクチームは、強いアタックを打って得点するために、「相手チームのセッターを狙って返球することで、ネット際でアタックを打たせないようにしよう」という作戦を考えた。



【写真13】 第7時 つかむシェア活動の様子

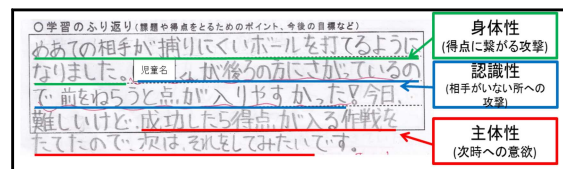
次に試しのゲームを行った。相手のポジショニングやアタッカーを確かめ、より得点に繋げるために「高めるシェア活動」を行う姿が見られた。すると、【写真14】のようにチームで作戦を立て、得点に繋げようとしていた。



【写真14】 チームで立てた作戦を生かして攻撃する様子

部分考察 8

【資料28】は、第7時終了後のJ児の感想である。緑線部から得点に繋がる攻撃ができたこと(身体性)、青線部から相手がいない所への攻撃が得点できること(認識性)、そして赤線部から次時で新たな作戦を試したいという意欲の高まり(主体性)が分かる。学級全体では、相手が捕りにくいボールといった認識性に関する記述が72%、また次時への課題や意欲など主体性に関する記述が66%の児童に見られた。これは、試しのゲームに位置付けた「高めるシェア活動」で得点につなげるための作戦や動きを付加修正・強化する中で、認識性や主体性が高まったからだと考える。以上のことから、認識性、身体性、主体性を高める上で「高めるシェア活動」を位置付けたことは有効だったと考える。



【資料28】 第7時終了後のJ児の感想

キ 味わう段階（2時間）

目標 仲間と協力し、バウンドバレーボール大会を楽しむことができる。

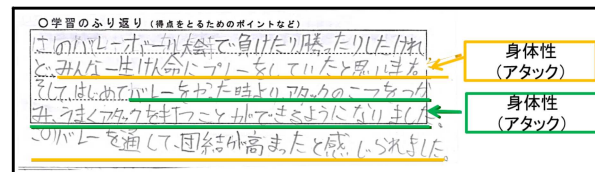
味わう段階では、「バウンドバレーボール大会」を行った。ゲームを行う中で、三段攻撃で打ち返し得点する姿や出場している仲間に対して動きのアドバイスすることができた。得点が決まると、【写真15】のように喜ぶ姿が見られた。ゲーム後には「味わうシェア活動」を行った。トスの上げ方や三段攻撃など、チームや仲間の成長を伝え合うことができた。



【写真15】得点を決め、喜ぶ白チーム

部分考察 9

【資料29】は、学習終了後のK児の感想である。「アタックを打てるようになった」という身体性に関する高まりや「仲間との団結が深まった」という仲間のよさや



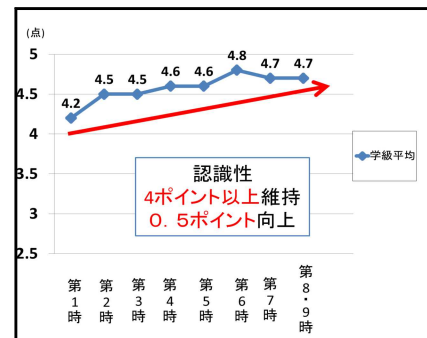
【資料29】学習終了後のK児の感想

成長を実感していることが分かる。三段攻撃やパスの繋ぎ方など身体性に関する記述は、学級全体で87%の児童に見られた。また、仲間のよさに関する記述は64%の児童に見られた。これは、これまでのチームでの学習を通して、仲間と作戦を話し合ったり、アドバイスをし合ったりすることで、連絡した動きができるようになったからだと考える。以上のことから、身体性の高まりや仲間のよさ、成長を実感させる上で「味わうシェア活動」を位置付けたことは有効だったと考える。

ク 検証授業Ⅱの全体考察

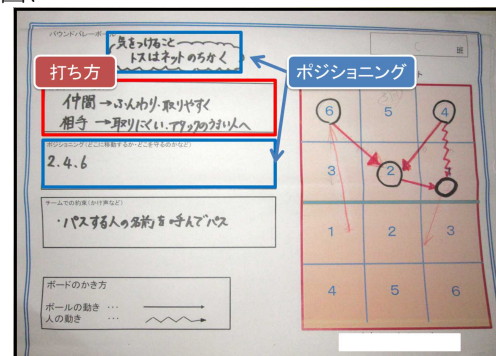
(ア)「わかる喜びを味わう子ども」について

【資料30】は、「得点をするための動きが分かったか」を5段階評価で自己評価し、学級平均でその推移を表したものである。この【資料30】から、4ポイント以上を維持し、また第8・9時では、第1時に比べ、0.5



【資料30】「得点するための動きをつかんだか」(認知性)の自己評価の推移

【資料31】は、学習後のチームノートである。【資料31】から、「打ち方」と「ポジショニング」で作戦を立て、コート図にもネット付近へ返すことを意識していることが分かる。これは、「打ち方」「ポジショニング」に着目させ、視覚的資料を用いて「シェア活動」を行ったことで、チームで連絡した動きをを共有することができたからだと考える。以上のことから、動きのポイントをつかんだり、連絡した動きを共有したりする上で視覚的資料を用いた「シェア活動」を位置付けたことは有効だったと考える。



【資料31】学習後のチームノート

(イ)「できる喜びを味わう子ども」について

【資料32】を見ると、第1時では、1回も満たなかったアタックが第7時までには、7回まで増えていることが分かる。このことから、ラリーやアタックなど関係した動きが高まったことが分かる。

また【資料33】を見ると、ラリー、アタックに関する自己評価の学級平均は、第9時では第1時と比べてそれぞれ1.3ポイント、2ポイント向上していることが分かる。これは、「ワンバウンドまでパスを許容」「セカンドキャッチ」など、ルール設定を工夫したことで、パスやアタックなどボール操作を容易にしたからだと考える。また、「打ち方」や「ポジショニング」に視点をおいて「シェア活動」を行うことで、チームで動きを共有化し、関係した動きを高めることができたと考える。

以上のことから、チームで動きを高めるために、アタックや連携した攻撃に視点を当てて教材化の工夫をしたことや、視点を与えた「シェア活動」を位置付けたことは有効だったと考える。

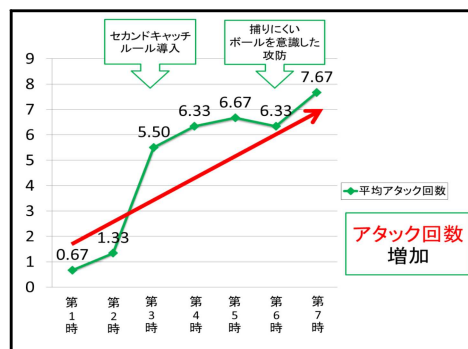
(ウ)「うごく喜びを味わう子ども」について

【資料34】を見ると、第1時から4ポイント以上を維持し、単元導入時から4ポイント以上と高い数値を維持していることが分かる。これは、チームで連携して攻防するようなルール設定を工夫したことや、「シェア活動」で課題やその解決方法を把握することができたことが要因だったと考える。

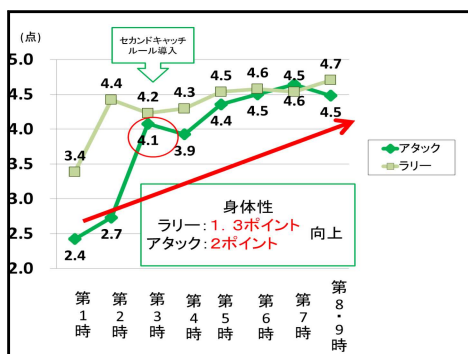
以上のことから、主体的に学習に取り組む上で連携した攻撃や誰もがアタックを打つことができるような教材化の工夫及び、課題やその解決方法を把握するための「シェア活動」を位置付けたことが有効だったと考える。

ケ 検証授業Ⅱの成果と課題

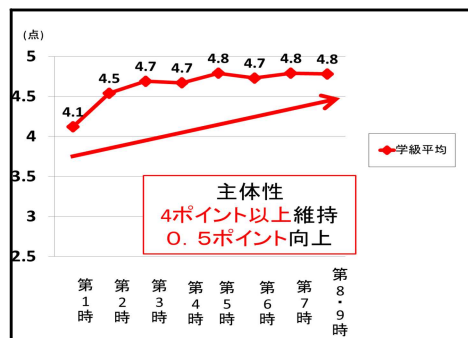
- 「運動の集団化」や「意欲の喚起」に視点を当てた教材化の工夫を行うことで、チームでのシェア活動がより効果的に機能し、動きのポイントがつかんだり、チームの課題を付加修正したり、連携した動きを強化したりすることができた。
- 「打ち方」と「ポジショニング」に着目したシェア活動を行うことで、視点をもって作戦を立てたり、アドバイスを送ったりすることができた。
- アンダーハンドパスやオーバーハンドパスなどボール操作をより高める上で効果的な練習方法を設定する必要がある。



【資料32】学級の平均アタック回数の推移



【資料33】「パスを繋いでラリーができたか」「アタックを打つことができたか」(身体性)の自己評価の推移



【資料34】「仲間と協力して、進んで運動できたか」(主体性)の自己評価の推移

(3) 検証授業Ⅲの指導の実際と考察

単元名 「みんなで行こう！！ジャングル探検」(表現運動 ア 表現)

ア 単元目標

○ 表したい感じを工夫したり，友達の動きを取り入れたりして，表現することができる。	【認識性】
○ 「ジャングル探検」という題材の特徴を捉え，対比する動きを組み合わせ「はじめ」「なか」「おわり」のひと流れを全身で表現することができる。	【身体性】
○ 運動に進んで取り組み，仲間と仲良く安全に運動を行うことができる。	【主体性】

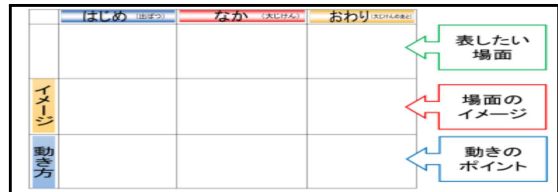

イ 単元計画 (6時間)

つかむ (3)	高める (4)	味わう (2)
<p>1 試しの運動を行い，学習のめあてをつかむ。</p> <p>〔つかむシェア活動〕 VTR や試しの運動を通して，学主課題をつかむ。</p>	<p>2 ジャングル探検の様子を捉え，チームで動きを作り，表現する。</p> <p>〔高めるシェア活動〕 チームで場面のイメージや動き方を共有しながら，動きを高める。</p>	<p>3 チームで作った動きを発表し合う。</p> <p>〔味わうシェア活動〕 チーム別の表現を見合い，チームや仲間のよさを賞賛し合う。</p>

ウ チームで活動する教材化の工夫

ルール設定の工夫	練習方法の工夫
<p>運動の集団化</p> <p>○チーム別の活動</p> <p>→「シェア活動」をより機能させるため</p> <p>意欲の喚起</p> <p>○「ジャングル探検」というテーマ設定</p> <p>→イメージをもたせやすく，多様な動きが考えられるため</p> <p>○創作活動</p> <p>→目的を明確にする</p>	<p>○単元導入時で全身での表現する等の動きの素地作り</p>  <p>【資料35】表現運動で取り扱った主な素地作り</p>

エ 動きや学びを共有し，高め合う具体的支援の工夫

動きのポイントや課題の共有化を図る資料	本単元における教具	教具の機能
<p>○表現運動のVTR</p> <p>→動きの課題を共有するため</p> <p>○チームノート</p> <p>→場面のイメージや動き方を言葉や図で記入し，シェア活動に活用するため</p>  <p>【資料36】チームノート</p>	<p>○新聞紙</p> <p>○ジャングルに関する写真</p> <p>○イラストカルタ(全12種類)</p> <p>(運動の課題の意識付け)</p>  <p>【資料37】イラストカルタ</p>	<p>④</p> <p>④⑤</p> <p>④⑤</p> <p>P 8</p> <p>資料 8</p>

オ つかむ段階 (2時間)

目標 表現運動のイメージをもち、試しの運動を行い、学習課題をつかむことができる。

(ア)つかむ段階(第1時)

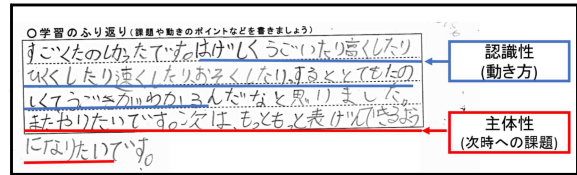
第1時では、表現運動についてのイメージをもたせるために、VTRを提示し、動きのポイントに関する「つかむシェア活動」を行った。すると、【写真16】のように児童から「体全体」「大きく動かす」といった言葉が聞かれた。その後、共有した動きのポイントを意識させながら、試しの運動を行った。



【写真16】VTRを見ながらのつかむシェア活動の様子

部分考察10

【資料38】は、第1時終了後のL児の感想である。L児の記述から、青線部から動き方といった認識性、赤線部から次時への課題といった主体性に関するそれぞれ記述があることが分かる。学級全体では、全身を使う、



【資料38】第1時終了後のL児の感想

大げさに動くといった認識性に関する記述が72%、次時への課題など主体性に関する記述が62%の児童に見られた。これはVTRを視聴したことで、表現運動の動き方をイメージをもったからだと考える。以上のことから、課題をつかみ、認識性を高める上で視覚的資料を活用した「つかむシェア活動」を位置付けたことは有効だったと考える。

(イ)つかむ段階(第2時)

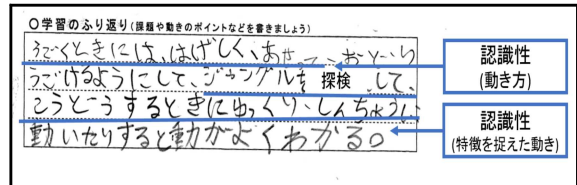
第2時では、まず前時で行った「まねっこダンス」等の運動を行った。そして、次に特徴をを捉えた表現ができるようにするために、ジャングルの写真を提示しながら「つかむシェア活動」を行い、そして、その後「イラストカルタ」を用いた表現運動を行った。そして、その後「イラストカルタ」を用いた表現運動を行った。すると児童は【写真17】のように自分の考えた動きの様子を即興的に表そうとする姿が見られた。



【写真17】宝探しに行く途中の様子を表すAチーム

部分考察11

【資料39】は、第2時終了時のM児の感想である。2行目の青線部からは、「ジャングルを行動するときには、ゆっくり、しんちょうに」という言葉があるように、場面の様子からどのような動きをしたらよいか書いていることが分かる。これは視覚的資料を用いた「つかむシェア活動」により、ジャングルのイメージとその様子を表す動き方を共有し、どのように動けばよいか分かった(認識性)からだと考える。以上のことから、認識性を高める上で視覚的資料を用いながら「つかむシェア活動」をすることは有効だったと考える。



【資料39】第2時終了後のM児の感想

カ 高める段階 (3時間)

目標 表したい場面の特徴を捉え、「はじめ」「なか」「おわり」の一連の流れで表現することができる。

(ア) 高める段階(第3時・第4時・第5時)

第3時では、仲間と対比した動きを取り入れた表現を行うこと、第4時では、チームごとに一番表したい場面を表すことを、そして第5時では、第4時で作った表現に「はじめ」「なか」「おわり」をつなげて表現することをめあてにした。第5時の「つかむシェア活動」では、【写真18】のように、チームで場面のイメージや動き方とともに、場面のつながりを意識して話し合う姿が見られた。



【写真18】 第5時 つかむシェア活動の様子

次に、共有したイメージをもとに、チームごとに創作活動を行った。その際に、「高めるシェア活動」を行い、チームごとに表現を新たに作ったり、付加修正を図ったりしながら、【写真19】のように、第4時で作った表現につなげる場面を作ろうとする姿が見られた。



【写真19】 第5時 「はじめ」の動きをつくる様子

【写真20】は、Aチームの作った一連の流れの表現である。

はじめ (出発)	なか (大事けん)	おわり (大事件のあと)
ジャングルの草木をかき分けて進む。	宝をめぐって、1対1の勝負だ!!	最後は、仲良くなって、宝を分けたぞ!!

【写真20】 Aチームが作ったひと流れの表現

部分考察12

【資料40】は、第5時終了後のN児の感想である。【資料40】の緑線部から、ひと流れで表現できたこと(身体性)、また赤線部からは、次時の発表会に向けての意欲の高まり(主体性)が分かる。これは、「つかむシェア活動」「高めるシェア活動」で、チーム内でイメージと動き方を共有することで、どのように動けばよいか(認識性)がわかり、一連の流れの動きを表現すること(身体性)ができたからだと考える。以上のことから、認識性、身体性、主体性を高める上で「高めるシェア活動」を位置付けたことは有効だったと考える。

<p>○学習のふり返し(課題や動きのポイントなどを書きましょう)</p> <p>全部 通読しておいたのでよかったです</p> <p>次の発表会は今までの練習を生かしてがんばりたいです。</p>	<p>身体性 (自己の伸び)</p>	<p>主体性 (次時への課題)</p>
--	------------------------	-------------------------

【資料39】 第5時終了後のN児の感想

キ 味わう段階 (1時間)

目標 チームで作った動きを場面の特徴を捉えて、全身で表現し、発表することができる。

第6時では、【写真21】のように作った表現の発表会を行った。チームで作った動きを「はじめ」「なか」「おわり」の一連の流れで表現することができた。また、他のチームの表現を児童は、自分たちとの違う動きに興味をもって見る姿が見られた。その後に行った「味わうシェア活動」では、表現を作ったチームの仲間の頑張りや伸びを賞賛し合った。



【写真21】作った表現を発表する0チーム

部分考察 1 3

【資料41】は、第6時終了後の0児の感想である。緑線部からは、練習の成果が出せた動きの高まり（身体性）、また黄線部から、他のチームのよさや成長を感じていることが分かる。このように身体性に関する記述は、学級の63%の児童に見られた。これは、「味わうシェア活動」を位置付けたことで、チームとして作り上げた表現を振り返り、達成感を味わうことができたからだと考えられる。以上のことから、身体性の高まりや仲間のよさを味わう上で、「味わうシェア活動」を位置付けたことは、有効だったと考える。

○学習のふり返り(課題や動きのポイントなどを書きましよう)

今までの練習の結果がよく出せてとてもよかったです。他のチームも今までで一番いいおどりをしていたと思います。これからはこのおどりを生かしてがんばりたいです。

身体性 (自己の伸び)

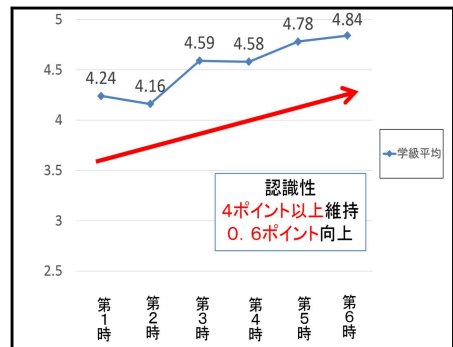
仲間のよさ・成長

【資料41】第6時終了後の0児の感想

ク 検証授業Ⅲの全体考察

(ア)「わかる喜びを味わう子ども」について

【資料42】は、「表したい様子を表現することができたか」を自己評価し、学級平均でその推移を表したものである。【資料42】から、4ポイント以上を維持し、また第6時では、第1時に比べ、0.6ポイント向上していることが分かる。また【資料43】は、学習後のチームノートである。【資料43】には、チームで表したい



【資料42】「表したい様子を表現することができたか」(認知性)の自己評価の推移

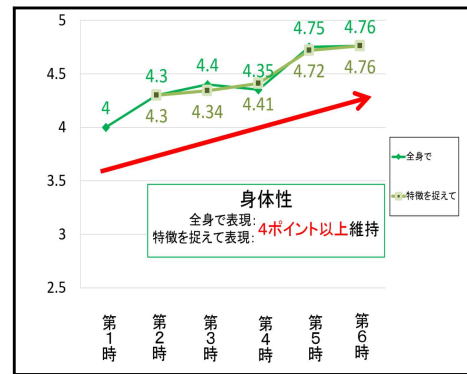
「場面のイメージ」とどのように表すかを書いた「動きのポイント」について書いていることが分かる。これは、「場面のイメージ」と「動き方」に着目させ、チームノートや写真等の視覚的資料を用いた「シェア活動」を行ったことで、場面の特徴を表す動き方を共有化を図ることができたからだと考える。以上のことから、認識性を高める上で視覚的資料を用いた「シェア活動」は有効だったと考える。

はじめ (出ばつ)	なか (大じけん)	おわり (大じけんのあと)
ぎちからし、はつ こわれがけのつりはわたる	大きな川にわたる、大きな橋にわたる	みんなて、たすけあて、てんきうなごからのたれた。
場面イメージ	場面イメージ	場面イメージ
動きのポイント	動きのポイント	動きのポイント

【資料43】学習後のチームノート

(イ)「できる喜びを味わう子ども」について

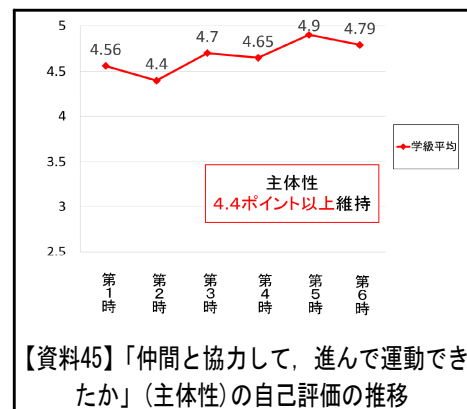
【資料44】は、「全身で表現できたか」「特徴を捉えて、表現できたか」に関する自己評価の学級平均を表したものである。【資料44】から最初から4ポイント以上を維持し、第6時まで0.76ポイント向上していることが分かる。「高めるシェア活動」を通して、チームでの動き方が広がったことで、特徴に捉えた動きを表現することはできた。しかし、動きの十分な高まりに繋がらなかったことや、明確な評価規準が設定できなかったことが課題だと考える。そこで、特徴を捉えた動きを高めるための練習方法を工夫することや、評価規準を設定するために、チームで創作する表現の場面の条件を設定するなど教材化の工夫が必要だと考える。



【資料44】「全身で表現できたか」「特徴を捉えて表現できたか」(身体性)に関する自己評価の推移

(ウ)「うごく喜びを味わう子ども」について

【資料45】は、学習に対する自己評価の学級平均を表したものである。【資料45】から4.4ポイント以上を維持していることが分かる。これは、ジャングル探検というテーマ設定やチームでの創作活動といった教材化の工夫、さらには「シェア活動」による仲間との意図的な関わりを設定したことで、課題意識をもって意欲的に取り組むことに繋がったと考える。



【資料45】「仲間と協力して、進んで運動できたか」(主体性)の自己評価の推移

以上のことから、主体的に学習に取り組むことができるように、運動の集団化、意欲の喚起といった視点での教材化の工夫をしたことや課題追求や共有化を図るために「シェア活動」を位置付けたことは有効だったと考える。

ケ 検証授業Ⅲの成果と課題

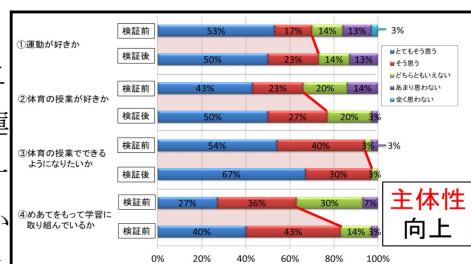
- チームで場面を特徴を捉えて、表現を創作活動として教材化したことは、「シェア活動」を機能させ、児童が主体的に学習を進める上で有効だった。
- 「シェア活動」の中で映像や写真などの視覚的資料を用いることは、場面の特徴を捉えたり、場のイメージを持つ上で有効だった。
- 動きの広がりがあったが、高まりに繋がらなかった。動きを高めるために、表現の素地をつくるような練習方法の設定や、相互評価できる明確な評価規準を位置づける必要がある。

8 全体考察

(1) チームで活動する教材化の工夫について

まず、競争やゲームのルール設定を行う際に「運動の集団化」という視点で教材化したことで、意図的な集団との関わりを作ることができた。これにより、「シェア活動」を通して、動きのポイントを共有化することで、各検証授業において認識性が高まった。また、動きを見合ったり、アドバイスをしたりすることで、チーム全体で身体性の高まりに繋がった。以上のことから「運動の集団化」の視点で教材化の工夫を行うことは、認識性、身体性を高める上で有効だったと考える。

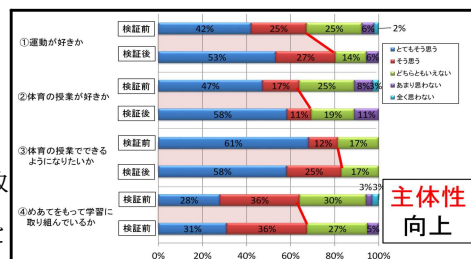
次に、「意欲の喚起」という視点で教材化したことで、【資料46】【資料47】のように、主体性を高めることができた。これは、教材化の工夫により、児童が運動の中で認識性や身体性を発揮し、楽しさや喜びを一層味わうことができたからだと考える。以上のことから「意欲の喚起」に視点を当てた教材化の工夫をすることは、主体性を高める上で有効だったと考える。



【資料46】検証授業前後の主体性に関するアンケート項目の変容(第6学年)

(2) 動きや学びを共有し、高め合う具体的支援の工夫について

目指す姿を捉えさせるために、VTRや写真などを提示した。その結果、目指す動きのイメージをもち、さらには課題意識をもったと考える。その成果として、【資料46】【資料47】のように「めあてをもって取り組んでいるか」という主体性の高まりに繋がったと考える。以上のことから、目指す姿を明確に捉えさせるために資料を用いたことは、主体性を高める上で有効だったと考える。



【資料47】検証授業前後の主体性に関するアンケート項目の変容(第4学年)

次に動きを言語化し、共有するための資料として、チームノートや作戦ボード等を用いてきた。これにより、シェア活動で動きを見合う視点(認識性)となり、動きのポイントを共有し、動きの高まり(身体性)に繋がったと考える。以上のことから、動きを言語化し、共有するための資料は、シェア活動を通して認識性や身体性を高める上で有効だったと考える。

9 成果と課題

本研究において、次のように仲間とともに運動する喜びを味わう児童を育むために、シェア活動を位置付けた体育科学習の在り方を究明することができた。

- チームで活動する教材化の工夫を位置付けたシェア活動を行ったことで、意図的な仲間との関わりをつくり、認識性、身体性、主体性を高めることができた。
- 課題や学びを共有するために、具体的支援を工夫したシェア活動を行ったことで、課題意識を持ったり(主体性)、動きを見合ってアドバイスをし合ったり(認識性)、チームの学びを動き(身体性)に生かそうしたりすることに繋がった。
- 検証授業において身体性の自己評価は高まっているが、児童のアンケートから、検証前後で約20%の児童が依然として自信をもっていないことが分かった。このことから、動きの高まりを実感できるような練習方法やシェア活動の工夫をする必要があると考える。

〈参考文献〉

- ・小学校学習指導要領解説「体育編」 文部科学省
- ・平成27年度全国体力・運動能力運動習慣等調査報告書 スポーツ庁
- ・体育の教材を創る～運動の面白さに誘い込む授業作りを求めて～ 岩田靖 大修館書店
- ・ボール運動の教材をつくる～ゲームの～魅力をクローズアップする授業づくりの探求～ 岩田靖 大修館書店
- ・体育 ポイントと授業づくり 東洋館出版